

南種子町における有機農業の取組拡大に向けた
有機水稻のグリーンな栽培体系マニュアル



令和8（2026）年3月
南種子町有機農業推進協議会

目 次

目的	(1)
1. 育苗	(2)
2. 水田準備	(3)
3. 施肥及び田植え	(4)
4. 水田管理	(5, 6)
5. 病虫害対策	(6, 7)
6. 収穫・調整	(7)

目的

南種子町は、地域の有機資源を活用した環境にやさしい農業生産及び消費を拡大し、オーガニックな町づくりに取り組むことで、環境汚染や人口減少、高齢化等の様々な課題の解決を目指すため、2022年6月にゼロカーボンシティを宣言し、2050年までに二酸化炭素の実質排出ゼロを目指しているなか、2023年3月にオーガニックビレッジを宣言し、持続可能な食料システムの構築に資する取り組みとして有機農業を推進している。

特に本町ではその一環として学校給食で提供する米について、町内産有機米の全量提供を目指している。

そのため、早期水稻栽培における普及可能な環境負荷低減技術を活用した栽培体系を確立するとともに、その技術を活用して水稻の有機栽培面積拡大を図るため、本マニュアルを策定する。

1 育苗

① 品種

本町の大半を占める、「コシヒカリ」を基本とする。なお、本マニュアルでは、以後コシヒカリについての栽培等について記述する。

② 種子の選別・消毒

健全苗を育てるため、必要に応じて塩水選を行い、苗いもち・立枯細菌・もみ枯細菌病の対策として、温湯消毒（60℃/10 分間）による種子消毒を行う。

苗箱の消毒をする場合は、保管していた苗箱を水洗い後に、種子消毒同様に、温湯消毒（60℃/10 分間）を行う。

③ 播種

育苗箱 1 箱当たり、100 g 程度を基本とするが、自身の栽培状況にあわせ播種量を調整すること。

④ 培土

使用する育苗培土については、牛セキ培土有機を基本とするが、有機 JAS に適した市販の育苗培土を使用してもよい。ただし、製品によっては特性が異なるため注意すること。

無肥料培土の場合、1 箱 1 g 程度の窒素（N）を施肥し、生育状況に応じて液肥等による追肥を行う。

※牛セキ培土有機 N-1.6g, P-1.6g, K-0.9g/1 箱 3.5 kgあたり

⑤ 育苗日数

播種後 30 日程度（草丈 15cm・3 葉期）の健全苗を育苗する。

⑥ 温度管理

ハウス内が高温になると、苗が徒長しやすくなり、高温障害・病害も発生しやすくなるため、ハウス内は 30℃以上にならないように、開閉する。

⑦ その他

病害対策として、育苗箱を並べる際は間隔をあけて並べ、風通しを良くする。



2 水田準備

アイガモロボによる抑草効果を高めるため、なるべく均平に代かきを行う。

① 代かき回数

代かきの回数については、入水後2～3回とし、ほ場の状況により実施する。

② 代かきのポイント

雑草対策としてトロトロ層を形成するため、深水で浅く代かきを行い、最終代かきはなるべく田植え前日に行う。

③ 均平作業

可能な場合は、最終代かきを GPS ハローにて行う。

※レーザーレベラーによる均平作業が理想的だが、本町水田は湿田で、近年秋雨前線により例年よりも乾きづらくなっている。

水田によって、可能であれば秋～冬にかけて稲株が残らないよう耕してから、レーザーレベラーによる均平作業を実施するのが良い。

レーザーレベラーについては、毎年実施するのは経済的にも難しいため、3～5年に一度するのが望ましい。



3 施肥及び田植え

施肥については、有機 JAS 適合資材を施用（表 1）し、田植え時期は慣行栽培と管理時期をずらすため、3 月末～4 月上旬を目安に田植えを行うのが望ましい。なお、施肥・田植えともに、慣行栽培後に機械等を使用する際は、しっかりと掃除を行うこと。

① 施肥

施肥作業については、ブロードキャスター等による植付前の施肥または、田植え機による同時施肥とする。

施肥量については、植付前に土壌診断を行い、過剰にならないよう調整する。

表 1（参考）

資材名	施用量（10a）	成分率（％） N-P-K	成分量（10a） N-P-K
タキライム	80 kg	0.2-0.8-0.4	0.2-0.6-0.3
オンリーユーキ	100 kg	6.0-6.0-4.0	6.0-6.0-4.0
合 計	180 kg		6.2-6.6-4.3

② 田植え

坪当たり 60 株を基本とし、分けつ数や雑草等が気になる場合は 70 株にするなど、水田の特性や自身の作業にあった株数とする。

なお、田植え時期についても上述を基本とするが、自身の作業性を考え時期を調整すること。

※アイガモロボによる抑草効果を高めるため、最終代かきから 3 日以内には田植えを行う。



4 水田管理

水管理と雑草については、アイガモロボ・水田ファーム・自動給水ゲート・乗用除草機による管理を行い、中干しや収穫等においては慣行栽培と同様に管理する。

① アイガモロボの稼働時期

田植え3～5日後を目安に、苗が活着してからアイガモロボを投入する。投入までに日数が空きすぎると、雑草の生育が進むため注意すること。

稼働時間については、投入後1週間程度は1日あたり1時間/10a、以降は最大2時間/10aを目安に、栽培する水田等に応じて調整し、稲が硬くなる草丈30cm（5月上中旬頃）を目途に撒収する。

※稼働時間は15分単位で調整できるので、朝・昼で1時間ずつ等調整すること。

推奨使用条件

健全な稲生育のため
お守りください。

水位・・・・・・・・・・5～10cm

1日あたりの稼働時間・・投入後1週間程度は1時間/10a
以降は最大2時間/10aまで

投入タイミング・・・・・・・・田植え3～5日後

使用期間・・・・・・・・・・3週間を目途に最大5週間まで

I GAM2 使い方 簡単ガイドより抜粋
詳しくは右のQRコードをご覧ください。



② 水管理

水位・給水等については、水田ファームおよび自動給水ゲートにて管理する。水位については、田植え直後は5～7cm程度で管理し、アイガモロボ撒収後は3cm程度で管理する。

なお、水田に藻類が発生した場合は落水し、藻類を乾かしてから再度入水する。



③ 乗用除草機等による除草

アイガモロボの撤収1週間後を目安に、除草機による除草を行う。回数については、5月中旬・6月上旬の2回を目安とし、水田の雑草状況に応じて実施する。雑草が目立つ場合、早めに除草機をかけること。



④ 追肥・穂肥

追肥については、葉緑素計（値35以下で追肥）による測定を行い、窒素成分1～2 kg/10aを施用する。なお、有機質肥料は化学肥料と比べ、肥効が遅いため、慣行栽培と比べ、1週間程度早めに散布する。

※オンリーユーキ1～2俵/10a（状況に応じて実施）

5 病虫害対策

有機栽培では化学農薬の使用はできないため、種子の温湯消毒による病害対策を実施する。また、カメムシ類等の侵入を防ぐため、畦の草刈り等を適期に行い、害虫対策に努める。

① 温湯消毒による防除

温湯消毒を行うことで、いもち病・苗立枯細菌病・もみ枯細菌病等への効果がある。



② 有機 JAS 適合資材による防除

苗立枯細菌病・もみ枯細菌病等の資材として、タフブロック、イネミズゾウムシの資材として、ゼロカウント粒剤などの有機 JAS 適合資材がある。

③ 畦畔の雑草管理

カメムシ類やウンカ類に対しては、有機 JAS 適合資材の農薬がないため、害虫の侵入を防ぐため、適期に畦草刈りを実施する。

6 収穫・調整

慣行栽培の生産物や異品種混入を防ぐため、慣行栽培収穫後に収穫する場合、コンバインや乾燥機等の掃除を徹底する。

なお、斑点米の混入を防ぐため、色彩選別機により調整する。

